

# V. エルサルバドル帰国後の報告

## ● 現地研修の研修報告書での報告

※現地研修の「研修報告書」を一部編集して掲載した。

### 1. 現地研修に対する各自の目的とその達成度

#### ● 伊藤篤志

① 日本の良さの再発見…豊かになった日本と貧困層の多いエルサルバドルとの違いを見聞きして、日本の良さを再発見し、日本の子どもたちに再認識してもらう授業を実践したい。エルサルバドルの治安や環境、教育を見て、「ありがたい」という言葉しか出てこなかった。この「ありがたい」という気持ちを日本の子どもたちや親たちに伝えたい。

② 環境問題…「きれいな国！日本」というキャッチコピーがあったように思う。「きれい」には、いろいろな意味が含まれる。環境的にきれい、平和できれい、洗練されてきれい、心がきれいなどいろんな「きれい」があるが、きれいな日本を守りたい。どうしたらいいか子どもと一緒に考えたい。

#### ● 大島風花

私は昨年度、開発教育指導者研修に参加し、5年生の子どもに総合的な学習の時間を使って開発教育を行った。しかし、子どもの中に「途上国の人はいかかわいそう」という気持ちが大きく残っているように感じた。今年度、持ち上がりの6年生を担任する私が教師海外研修に参加した目的は、途上国に住んでいるからといって、彼らがかわいそう、不幸なわけでは決してなく、むしろ彼らは私たちが忘れかけているものを大切にしていたり、それぞれに楽しいことがあったり、幸せに思ったりすることがあるということを感じてほしかったためであり、そのためには現地研修で生の教材を多く集める必要があった。エルサルバドルにおいて、何よりも家族を大切にしていたり、目が合えば笑顔で挨拶してくれたりする人々と直接触れ合うことができ、現地研修の目的は果たすことができたと思う。私が実際に見てきた彼らの様子や言葉を伝えることで、子どもが自分の大切なものや「豊かさ」について、さらには自分ができることについて考える機会にしたい。

#### ● 駒谷奈津

昨年の夏、フィリピンからの双子の転校生が私のクラスにやってきた。今年度は、海外から帰国した児童と、外国をルーツにする児童を受け持っている。私は、日本の学校なのだから、日本の生活になじまなければ彼女達、彼達の

ためにならないと考えていた。しかし、「日本なんて嫌い。」と言った子どもの一言で自分の視野の狭さに気付かせてもらった。そこで、彼らのように、外から日本を見てみたいと思った。観光ではなく、他国を深く知ることによって自分が漠然と捉えていた世界から日本を見、考えて課題を明確にしたいと思った。だから、この研修に参加をした。参加をして、自分の思考の狭さや思い込みにもハッとさせられた。自分の見方、考え方が変わる体験だった。この研修に参加した意味が大いにあったと思う。そんな気付きを子どもと共に見つけていきたい。

#### ● 吹田沙織

事前研修で、エルサルバドルには貧困、治安、環境問題などいくつかの課題があるが、ほとんど出回っている資料がなく、現状について知る術がなかった。私はネットや文献だけでは知ることができないエルサルバドルの情報を、実際に見て、現地のお話を聞き、体験して、「現地の”そのまま”を伝え、考えられる」教材収集と多くの方との交流による自分の価値観の開拓が今回の目的であった。治安上、制限があり、貧困地区など現状をすべて見ることはできなかったわけではないが、気になることが消化不良にはならないように努めた。また、子どもや先生、一般市民、教育省の職員など、現地のいろいろな立場、環境の方と話をすることができ、各立場からの話を聞くことができた。現地の方だけでなく、現地で活躍している日本人からも日本人の視点で見えていることを教えてもらうことができた。参加した先生方と気づきの共有もできた。

#### ● 鈴木理恵

今回この研修の参加の目的が3つあった。①目、耳を使い五感で現地を感じ、エルサルバドルの人と交流すること。②エルサルバドルと日本の繋がりをみつけること。③エルサルバドルで働く日本人のお話を聞き様々な仕事があることを日本の生徒に伝えること。①については、訪問した学校の生徒達や、ホームステイの家族と身振りを交えながら話し、子どもたちの元気な笑顔や家族を大切に思う心は日本と変わらないと感じた。②については、車、電化製品など品質の良さで知られている日本製品やアニメが目に入ったが、本当の繋がりは、青年海外協力隊やシニア海外ボランティアの方が、学校や市役所、農園などで現地の人の中に入り溶け込んでいることだった。③については、その

ような日本人が、無くてはならない存在になっていること。現地での青年海外協力隊の活動を見ていくにつれ、中米統合機構(SICA)広域アドバイザー米崎さんの「国際協力も最後は人です」と言う言葉が確信に変わった。今後この貴重な経験を日本の生徒達に肯定的に伝え、エルサルバドルを身近に感じてもらい、青年海外協力隊の姿を通して海外に目を向ける教材作りをしていきたい。

### ● 田中真弘

どうしたら開発途上の国がより豊かになるだろう。どうしたら資源がない国が、資源がある国と国際的に渡り合えるのだろう。などと現地研修に行く前は考えていた。ほんの2週間であるが、現地を知ることができた今では目的の達成度としては“End of the Beginning”「はじまりのおわり」というところであろう。まだまだエルサルバドルのことを把握したとは言えないが、ほんの少しだけエルサルバドルのことを深く考えることができた2週間であった。とりわけ産業という観点で豊かになるすべを探る目的は、コーヒー農園の実態について知ることができたことが大きい。4年前からロアカピが発生していて数万人の人達が失業したこと、ロアカピに耐性があるコーヒー豆は味が良くなく、味が良いものはロアカピに弱く、どういう風に掛け合わせれば商品として成り立つのかを研究していることは興味深かった。地道に研究を重ねて研究結果に数年もかかり、目に見える成果にたどり着くまでには相当の辛抱が必要なおも開発教育に似ていると感じた。

### ● 中川朋子

「現地の現状や課題を知ること」、「現地に関する生きた教材を集めてくること」が主な現地研修の目的だった。前者は、青年海外協力隊の活動視察、専門家や在エルサルバドル日本国大使、教育大臣等、様々な立場の方々のお話から、現地の大きな概要や日本の活動の様子を理解することができた。ホームステイでは、現地の方に自国に対する思いをじっくり聞くことができ、大変貴重な体験となった。また、地道な活動の積み重ねが、日本への信頼の大きな基となっていること、アドバイザーとして現地のニーズに合わせた加工技術や柔軟な対応が求められていることなど、日本の国際協力の実態や現状、課題にも気付くことができた。五感を使って学んだことを、「自分の言葉で」子どもたちに伝えていきたい。後者に関しては、メンバーと協力し、大まかなものは集めることができた。しかし、自分や現地の方も、自分の国の歴史をよく理解していない部分が多く、本当にエルサルバドルを代表するものか分からないものも多かった。事前の勉強不足だと反省した。

### ● 野村佳世

社会科の教員として、「世界」を伝える授業を行ってきたけれど、写真資料やグラフ資料では読み取れない、人々の感情や願いを生徒に伝えたいと思い、自ら現地に行き、調査を行うことで、自分にしかできない教材を作りたいと考えた。研修を通して教材にしたいと考えたのは、北アメ

リカ州の学習をする単元において、エルサルバドルでは、国外移住者からの送金によって国の経済が支えられていることを伝えたい。いつもなら、アメリカ合衆国を主に取り上げ、増加するヒスパニックによりアメリカ合衆国が抱える問題点を扱ってきた。しかし、今回はアメリカ合衆国に入学する中米の人々の数や彼らの願いに焦点をあて、現地の声を生徒にも届ける授業を行いたい。人々が願いをもって生きる姿に共感できる生徒がいるはずである。また、学校やショッピングモールには常に警察が銃を持ち、立っていること、子どもが育つ横には常に警察の存在があることを考えることで、エルサルバドルの生活の現状を伝えたい。

### ● 樋口耕平

英語の教員として普段授業などで海外の話をすることも多く、興味深いことに生徒の異文化に対する関心は意外と高い。このこと自体は私自身も前向きに受け止めている。ただ、外国の様子や文化について話をすることはできても、外国人の人たちが実際に感じていることや将来のビジョンなどといった、価値観に迫るような内容はこれまでできずにいた。高校卒業後、いまよりもっと広い「社会」という文脈のなかで生きていく生徒たちにとって、外国人のリアルな感覚に触れ、自身のそれと比較することはとても有意義であるとして、本研修の最大の目的として定めた。具体的には「自国の誇り」や「何をしているときが一番楽しい」といった質問をした。回答のなかには、概ね予想できたものや日本の高校生が想像しないような答えもあり、内容は多岐に渡った。このインタビューの共有が生徒の異文化理解及び自己理解につながるものであると期待している。

## 2. 柱1「訪問国に肯定的に出会う」観点から学んだこと



### ● 伊藤篤志

エルサルバドルの家族観は大変参考になった。エルサルバドルで出会った人たち（大人も子どもも）誰もが一番大切にしているのは「家族」と答えていた。日本で家族というと、ほとんどが一緒に住んでいる人を指す。もちろん家族と離れて大学や就職している人たちも家族の一員であるが、父親の兄弟・母親の兄弟などもっと大きな意味での

家族を指すことはない。しかし、エルサルバドルでいう家族は、この大きな家族を指し、その大きな家族が強い絆でつながっていることに驚いたし、うらやましくも感じた。日本は核家族化により家族の絆も薄れ、地域のコミュニティも崩れている現在を考えると、近代化によって無くしたものの大きさを感じる。今後、エルサルバドルも近代化に進んでいくが、便利だけを追求する近代化では無く「家族」「地域」のコミュニティを大切にす文化を守ってほしい。

### ● 大島風花

エルサルバドル＝中米＝ラテン＝陽気と思っていたが、意外にもエルサルバドル人はシャイ。でも、目が合うとにっこりはにかんで笑ってくれる。そして、「中米の日本」と言われるほど勤勉。確かに暇そうに座ったりしている人を街中であまり見かけなかった。地球の裏側の国を、一気に身近に感じた。そして、エルサルバドル人が口々に「もう食べたか？」と聞いてくるほどの伝統食、プブサ！なかなか食べる機会がなく、やっと食べたのはホームステイ先の次男のプブサを奪って一口。日本のおやきのようなもの。スチトトで最高の景色を見ながら手作りしたプブサもおいしく、教えてもらってみんなで歌った通り、「プブサ大好き！」になった。一番心に残ったのは、家族を思う気持ち。自分の家で寝ることが1番だから、例え大学まで片道2時間でも家から通う。家族1番の優先順位という価値観が当たり前のエルサルバドルの人々に、日本で忘れられかけていることを教えてもらった気がした。

### ● 駒谷奈津

エルサルバドルは、全く知らない、遠い国だった。だから、どんな国なのか楽しみにしていた。しかし、調べれば調べるほど、マイナスのイメージが膨らんできた。殺人率の高さ、情報の少なさ、治安の悪さ……。実際にエルサルバドルの人に会うまで怖い国というイメージは拭う事が出来なかった。実際に会ったり話したりする内に、マイナスイメージは頭の隅に追いやられていった。エルサルバドルが段々と身近な国になっていった。特に子ども達との出会いで、自分が教師である喜びをしみじみと実感した。子ども達の目はキラキラとしていて、どの国も子どもは同じだとうれしくなった。帰国し、コーヒーショップへ行く度に豆の産地を確認する。コーヒーが主な産業のエルサルバドル、その名を探するために。産地「その他」と書かれた中にエルサルバドルがあるのかな、そんな話を職場の同僚としているとエルサルバドルがどんなに遠い国に思えなくなっていった。

### ● 吹田 沙織

エルサルバドルの治安は世界でワースト2位だと聞いた。治安が悪い原因に貧困があり、仕事がなく、「職業が泥棒」として、収入はないが大事な家族を養うために犯罪をしていると聞いて、この国の見方が変わった。ギャングもいるのが事実だが、出会った人たちはみんな親切で、自分たちの国をよりよくしていきたいと前向きに物事を考

えており、自分たちの置かれた状況を悲嘆せず、これから先に何ができるか、未来に向けて意識しているように感じた。限られた環境の中だからこそ、最大限に生かそうと考えるのかもしれない。訪問先では、人々と交流する機会も多く、もちろん言葉は通じず、通訳さんに頼る場面も多かったが、伝えたい気持ちと理解しようという思いがあれば、動作を含めてのやりとりで何とか伝え合うことができ、子どもから大人まで多くの生き生きとした笑顔に会い、こちらも自然と笑顔になれた。このつながったという楽しい気持ちを子どもたちにもぜひ、伝えていきたいと思った。

### ● 鈴木理恵

中米大学で耐震について学んでいる現地の大学生に日本の印象を聞いた時「技術が進んでいて、一度は行ってみたいあこがれの国」と答えた。好きなアニメは「悟空（ドラゴンボール）で、大学内では日本のコスプレ大会にも参加した」という彼は、少し恥ずかしそうに法被姿の写真を携帯で見せてくれた。中米で最も親日的といわれる国エルサルバドルを実感した瞬間だった。コーヒー農園 (Procafe) を訪問したとき、コーヒー園で蚊を追い払いながら聞いた様々なコーヒー品種の木。品種開発の研究室でも一つ質問すると、時間を忘れてどの人も熱心に答えてくれた。(何故かいつも時間が押してしまったけれど) 親切な人柄でもあるが、それ以上に人と話すのが大好きな人なつこい人々の存在がこの国を象徴していると、あちこちで感じた。コロティケの小学校の日本紹介の授業で、竹とんぼをしたときのこと。子ども達も大喜びであったが、なんと校長先生や、警護の警察官まで竹とんぼ遊びに興じ何度か何度も飛ばしていた姿は今でもほほえましく思い出される。「人」がキーワードのエルサルバドルであった。

### ● 田中 真弘

長いようで短かったエルサルバドルでの2週間の滞在で肯定的に感じたことは多かった。内戦時代の爪痕が残り、武装集団マラスが政府と対立して治安が悪く、なかなか国内経済が落ち着くには時間がかかりそうだ。そんな中でも、教育に力を入れ、農協の改革を進め、コーヒーの品種改良で生きていくすべを探る草の根的な努力も垣間見られた。そこには、一人一人の人が天候や環境に振り回されながらも何とか生きていくという力があつた。JICAによる国際技術協力や草の根的なボランティアの活動や地元の人との交流など、この国では協力なくして発展は語れなく、それらの恩恵を素直に受け止め、共に成長していこうという姿勢が随所に見られた。問題を抱えながらも一番大切にしたいと感じたのは、人のための人による協力する気持ちと行動だと強く感じた。エルサルバドルを肯定的に感じるのには、そこに生きる人の生き方であり、天災であれ人災であれ、どんなに環境が悪かろうが前向きに生きる姿だ。

### ● 中川朋子

直接触れ合い、考えを伝え合う体験は、何にも代えがたい貴重なものである。そのような出会いが、楽しく明るい

ものほど、よりその国を身近に感じることができる。ホームステイ体験は、たった一晩ではあったが、現地の方と直接触れ合うことができ、大変有意義な時間となった。特に、国のために勉強しようとする若い人に出会い、本当に明るいエネルギーを感じた。一方で、様々な原因が重なり、そのように考えられない人もたくさんいることを知った。しかし、そのような現状を知ったからこそ、希望に向かって進んでいる人の存在がより大きく見えた。明るい未来を信じて努力している姿に感動する心に、国籍は関係ないと思った。また、「一番大切なものは、家族。」エルサルバドル人のどの年代に聞いても、この答えが返ってきた。物ではなく、人を大切にしようという心に好感をもった。肯定的な出会いには、人との触れ合いが欠かせない。子どもたちにも、その楽しさを伝えたいと思った。

### ● 野村佳世

エルサルバドルは、中米に位置しており、熱帯気候に属しているが、日中は、風も穏やかに吹き、滞在期間中は、過ごしやすい。夜は、激しい雨に襲われることがあるが、朝になると何事もなかったように晴れの日が続く。中米の天気の様子は、面白い。エルサルバドルの人々は、温かく、親切である印象を受けた。どこで出会っても、微笑む姿があり、アジア人に対しても親切に接してくれた。街には、色とりどりの落書きがあったり、触れるといったような有刺鉄線があったり、日本では見られない風景に感激した。また、エルサルバドルは中米で唯一カリブ海に面していない国で、食文化もオリジナル感がある。その中でも、なんといっても、「プサ」が代表的な料理で、国民にもとても愛されている伝統的な食事である。サンビセンテヤスチトなどには、観光資源がある。現在、観光やビジネス客の集客ができる国へ発展していく方法を考えているところである。

### ● 樋口耕平

学生時代に中南米のことについて勉強する機会があり、また中南米諸国出身の知人たちがとても気さくで楽しい人ばかりだったという理由だけで、漠然とはあるが、この地域に対してとてもいい印象を抱いていた。今回、各訪問地へ向かう道中ではどこも銃を抱えた警備員がおり、建物の塀には有刺鉄線がぐるぐる巻かれ、その光景を見る度にうっすら緊張感を覚えずにはいられなかった（ほぼ毎日見ていたが）。しかし、実際に人々と接すると、とても穏やかで真面目な人ばかりで、いつも良い意味で期待を裏切ってくれていた。激しい内戦の過去や人々の生活を不安にさせるギャングの存在は、この国に暗い影を落とすばかりであるが、このような温かく勤勉な人々が協力し合うことで今後さらに発展していくことを心から願っているし、日本にいてもその動向に注目していくつもりである。

## 3. 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」観点から学んだこと



### ● 伊藤篤志

日本で教育に関わる人間として、改めて教育の大切さを痛感した。エルサルバドルの課題は治安と環境問題だと思う。治安も環境も整えば、自然豊かで人の温かいエルサルバドルは観光で外貨が稼げる国になると思う。外貨が稼げるようになれば経済が回り始め、生活が豊かになる。生活にゆとりができれば学校の施設設備も整備され、誰もが学校に通いレベルの高い学校へも進学できるようになると思う。教育が先か経済が先か、どちらも大切であると思うが、小さい時からしっかりと教育が受けられれば、治安の改善や環境の改善に寄与できる人材が育つと思う。国として教育に力（お金の投入）を入れられるように、そのためにはエルサルバドルが経済的自立できるように豊かになった日本が経済的な援助ができるといいと感じた。

### ● 大島風花

驚いたのは、エルサルバドルはこんなに離れているのに、日本と同じ環太平洋造山帯に属しているということ。ということは、地震が多い。同じ地球に暮らしているんだと実感した。日本はこれまで地震という天災に悩み、対策を行ってきたが、エルサルバドルも同じように困っている。日本が培ったこれまでの知見が、エルサルバドル流の方法に変えて、現地で生かされていた。意外な共通点の2つ目は、伝統文化の藍染め。私の住む名古屋市緑区にも有松鳴海絞りがあり、興味がわいた。エルサルバドルでは、19世紀末ドイツでの化学染料開発により伝統が途絶えてしまったが、同じ伝統文化をもつ日本の技術者が指導をし、再開された。伝統文化を大切にしたい気持ちは同じだと感じた。物質的なつながりでは、街中を走る日本メーカーの車。そしてエルサルバドルは、近年の日本のコーヒー輸入国7~11位。コーヒー研究所では、異常気象やカビの病気に悩まされながらも、品種改良をくり返し、コーヒーを生産し続けてくれているその努力のおかげで、自分たちもコーヒーが飲めるんだと感謝の気持ちをもった。

### ● 駒谷奈津

エルサルバドルの教育省を訪問した際、全日制の学校を担当するロランド・マリソ氏からお話を伺った。様々な話

題が出る中、印象に残った一言がある。それは、「学校へ行かないのではなく、行けないのです。」という一言だ。エルサルバドルでは貧しい家庭のために働いたり、地域に学校が無いなどの事情により教育が行き渡らないという課題がある。日本では小・中学生が就労したり、学校そのものが無いから行けないという事例は稀だが、学校に行きたくても行けない子は存在する。私が思う訪問国との同一性は、教育の機会均等が重要である、ということだ。ロランド氏は、教育によって救われる子もいるし、国の未来のために今、教育を大切にしたい、という熱い思いを語ってくれた。教育に携わる身として非常に感銘を受けた。教育の重み、学ぶ意義、学校の存在。全ての子どもの「学びたい」が実現する社会を創る一員でありたいと思う。

### ● 吹田 沙織

日本とエルサルバドルは今年、国交 80 年を迎えた。しかし、日本ではエルサルバドルのことがほとんど知られていない。私もエルサルバドルという国自体を知らず、意識したこともなかった。実際に、現地に行き、話を聞いている中で、エルサルバドルは、自国で資金を稼ぐための資源も技術も乏しいことがわかった。日本も資源がない点は同じだが、技術を持ち、資源を輸入し、加工するなど技術力で発展してきた。その技術を活かして、エルサルバドルに空港や高速道路、港などを作ったり、多彩な人材を派遣し、知識や技術を伝え、日本はエルサルバドルという国の発展を支えている。その一方で、日本の戦後復興のために日本の紡績工場が進出した国、世界で 2 番目のトヨタ自動車販売代理店ができた国がエルサルバドルであるように、日本とエルサルバドルの関係は一方的ではなく、互いに支えあう関係であることがわかった。

### ● 鈴木理恵

日本にいたときは、遠いエルサルバドルに日本とどのような繋がりがあるのか全くわからなかったが、現地に着くと、看板や道路を走っている車などの日本製品が最初に目に入った。到着した時に利用した国際空港が日本の支援で作られたと聞き、国のインフラにも日本の協力があると知った。しかし、何日か経ち何人かの青年海外協力隊の話を聞くにつれて、本当の繋がりや人々の考え方はどうかと思うようになった。青年海外協力隊のいるいくつかの学校を訪問したとき「ゴミを拾う」「整理整頓」「時間割を守る」「授業規律」などの基本的な考え方を共有することから始めていた。日本では当たり前だと思われることには、実は意味があり、意識していないが教育システムとして大切な考え方だと改めて気づいた。また、訪れた小学校などの子ども達の元気な笑顔はエルサルバドルでも日本でも同じであるし、おしゃれに興味がある女子高生もまた同じであると思った。

### ● 田中真弘

エルサルバドルは「中米の日本」と言われていて、人は温かく勤勉でまじめな性格である。おっとりしてその日暮

らしを楽しむ様子は、どこことなく昔前の日本を思い浮かべさせる。自然豊かな山々も日本の風景に似ていることもあり親しみを覚える。つながりに関しては、日本のODAによる技術やインフラの整備、JICAや技術ボランティアによる地域開発のための協力、その他草の根活動によるボランティアなど、一見様々な分野でつながっていきそうだが、エルサルバドル在住の日本人はほんの150人程度で、まだまだ日本からは遠くて知られていない国だと言わざるを得ない。エルサルバドル人も日本人を見ても、中国人だと思っているらしく、もっと言えば、アジアの国は皆同じという感覚があるらしい。私達もエルサルバドルが隣のニカラグアやホンジュラスとどう違うのかわからないことが多いことと同じなので、日常的にお互いにもっと知り合う機会が増えれば良いと感じた。

### ● 中川朋子

ソフト、ハード両面から、日本とのつながりを感じることができた。どの訪問先でも、青年海外協力隊の方々への感謝の言葉が聞かれ、こうした現地の人々との地道な活動の積み重ねが、日本とエルサルバドルを肯定的につないでいるのだと感じた。コーヒー研究所では、「日本は品質の良いものを求める。」というお話をうかがった。その研究所で長年開発された現地オリジナルのコーヒー豆が、日本に輸入され販売されている。研究員の熱心な取り組み姿勢と「より良いものを」という思いは、日本と通ずるものを感じた。一方、町には日本製の車があふれ、電化製品でも、日本製のものが多く見られた。ドラゴンボールも大人気。現地の子どもたちは、漫画のカードや主人公を描いた自由帳を、笑顔でたくさん見せてくれた。しかし、対日貿易は約80億円以上の赤字。日本製のものが増えるのは、うれしい気持ちもあるが、相手国にどのような益をもたらしているかは、正直不透明である。

### ● 野村佳世

物質的な共通点は、日本車の数が多く、道路を走っているのは、トヨタ、ホンダ、三菱など日本でなじみのあるものばかりである。エルサルバドルの人々も日本と言えば「トヨタ」のイメージを持っているようで、日本車がエルサルバドルの人々の生活を支えている。電化製品においてもシャープなどの日本製品が多い。スーパーに行けば、日本食コーナーがあり、日本語で書かれたパッケージを見ることができる。のりやわさび、醤油などが高価格ではあるが、売られている。エルサルバドルの人々も日本食を味わう機会がある。また、精神的な共通点は、勤勉であることである。多くのエルサルバドルの人々が、エルサルバドルの自慢は、「勤勉である」ことを挙げた。確かに研修中は、仕事をしている姿を見ることが多かったが、エルサルバドルの人々は、自分の任された仕事を黙々と精一杯こなすという印象を受けた。時には、少しだが残業もするようである。

### ● 樋口耕平

「エルサルバドルの人々は勤勉である」という情報は、

本やインターネットなどで割りと簡単に得ることができると。実際に現地の人々と接してみると、仕事への思いを話しているときの内容はもちろん、表情や仕草を見ていると、日々仕事と一生懸命向き合っているという雰囲気を感じ取ることができた。エルサルバドルは中米に位置しているということで、陽気で情熱的なラテンの街という先入観を勝手に抱いたものだが、実際に人々と接してみると非常に穏やかで優しい人ばかりであった。いわゆる「ラテン系のノリ」というものはあまり実感しなかった。滞在期間がもっと長ければ、感じる点はもっとあったと思われるが、日本とエルサルバドルは、物質的なつながりや同一性はあまり多くないと思う。だが、人々の気質という点においては、両国はとても似たものがあると感じた。

#### 4. 柱3「共通の課題について共に考え、共に越える」観点から学んだこと



##### ● 伊藤篤志

恵まれている日本について考えさせられた。治安・環境・教育などすべての面において日本はエルサルバドルより恵まれている。しかし、恵まれていることに慣れてしまい気づかない日本はこれでいいのかと疑問を持った。私たちは、戦後生まれで日本での戦争の事実をほとんど知らないし、日本では、戦争の名残もほとんど無くなっているし、戦争の語り部もいなくなっている。現在、戦争を知らない者が教育の現場に立っている。エルサルバドルは内戦の爪痕がまだ色濃く残り、国自体が内戦の負の遺産を引きずっている。しかし、内戦の悲劇を知っている人が減ってきている事も事実である。エルサルバドルで見た治安の悪さや劣悪な環境を肌で感じて、平和の大切さとありがたさを痛感した。この気持ちを今の子どもたちに伝える使命があると再認識した。

##### ● 大島風花

スチトの語学学校の先生方に、内戦についての話を聞くことができた。とても辛いお話で申し訳なかったが、お聞きすべきことだったので質問してよかった。「スチトの人口は内戦によって4万人から8千人に減り、その方の家族は様々な理由から全員いなくなりました。皆それぞれに辛い思い出があるが、今は戻ってきた家族もあり、

辛いことがあっても神の御加護での乗り越えてきた」とのことだった。年配の先生のお話を聞いて、若い先生は「絶対にもうそんなことは起こしたくない。体験していないので、本当の辛さがわからないことが残念だ」と言っていた。エルサルバドルにも日本にも内戦・戦争の爪痕があり、それを若い世代が引き継いでいき、同じことを繰り返さないようにしなければいけないというのも、共通の課題であると思う。また、頻繁に起こる天災、異常気象も共通の課題だ。子どもと何について一緒に考えるか、まだ悩んでいる。

##### ● 駒谷奈津

エルサルバドルで感じた事、それは日本のように何事もきっちり決められていない事である。様々な事に「大丈夫かな。」と思ったが、結果、問題はなかった。日本は世界的にみても、計画が緻密でありルールが徹底している。物事は滞りなく進むが、皆が守り、同一の行動をするという前提があり、窮屈さも感じる。エルサルバドルのゆるやかさは、心のゆとりである。時間通り、ルール通りに動くことに慣れている私にとって初めは戸惑ったが、日本に必要な考え方もしれないと思うようになった。逆に日本の時間管理システムは窮屈に思え、加えて忙しさもあるのだけど、やるべきことをやりきる達成感を得やすい。この考え方はエルサルバドルに必要な考え方かなと思う。この一例が示すように、共に考えるということは、どちらの課題も良さも知り、お互いの考え方を認め合える関係を作ることだと思う。どちらか一方が正しい事は無い。人と人とが対話し、考えをわかった上で何ができるかを実践していくことが共に超える事につながるのではないだろうか。

##### ● 吹田沙織

世界全体で起きている気候変動の影響は、エルサルバドルにも起きている。雨季にも関わらず、雨が少なく、農作物が枯れる被害が出たり、気候の変化でコーヒー農家では口ア病により、生産力が落ちている。これは中南米の他国でも、アフリカでも起きていることだった。生産国では品種改良や生産性を効率化し、対策を取り始めていた。そこへ私たちには何ができるかとぼんやり意識していた中で「需要の増加とは対照的に、コーヒー豆の収穫量は減少し、日本のある店舗で複数の銘柄が入手困難になっている」というニュースを帰国後に見た。自分とエルサルバドルの問題が直接、つながった瞬間だった。先のことではなく、今、起きている問題である。世界で起きていることは、たどれば私たちに関係してくる。共通の課題として取り組むためには、私たちの生活は世界とつながって成り立っていることを、自分たちの問題としてどれだけ多くの人たちに伝えられるかだと思った。

##### ● 鈴木理恵

エルサルバドル人はなぜ「家族が一番大切なもの」と答えるのだろうか。その価値観はどこからくるのか。日本でも親が子どもを愛する気持ちは同じであるが、ここでは子どもか親、祖父母、親族を思う気持ちの強さは日本の比で

はない。夕食時のレストランでウエーターのアルバイトをしている18歳の男性ですら、「大切なのは家族」「母に会いたい」と言う。家族や親戚の人々に囲まれて過ごしたために、遠方の大学でも自宅から通う大学生。コミュニティを大切に、誕生日を親族で祝う家族の結びつきを大切にしている人々。この価値観は、日本でもかつて大切にしてきた価値観であったが、現在は個人の生活を尊重する傾向がある。この国にカトリック教徒が多いのも、価値観に大きな影響を与えているが、内戦で多くの命を失ったことが、より結びつきを強くしているのかもしれない。ここエルサルバドルでも若い人たちは内戦の経験がない。「戦争の経験を若い世代にどう伝えていくか」日本人にとっても忘れてはいけない問いであると思う。

### ● 田中真弘

開発途上の国がいかに発展していけるのか、資源がない国がいかに国際競争に打って出せるのか、武装勢力が政府に圧力をかける国がいかに住みやすい国になるのか、これらの課題は日本が戦後経験した国の復興に似たものがある。日本は戦後疲弊した経済を立て直すために国民が一団となり経済回復に努めた経験がある。この経験を何とかエルサルバドルの発展に役に立てられないだろうか。日本人がインフラ整備、農業経営の方法、観光業のあり方、看護の考え方、教育の方法など、ボランティアの方々から知恵を授ける一方、エルサルバドル人がこれを学び、自らの手で発展していけるようになっていく。そして、日本人もこの国際協力の経験を日本での活力とし、エルサルバドル人の良い気質から、日本での不登校や過剰労働といった問題に対処していく。そういった相互での助け合いや学び合いについて、もっと多くの人に開発教育を通して考えてもらえれば、よりよい世界になっていくだろう。共に考え、共に問題を乗り越える意識が大切であることを再認識した。

### ● 中川朋子

どこへいっても、ゴミのポイ捨てやマラス（青少年凶悪犯罪集団）の問題が聞かれた。ゴミ問題は、日常習慣に大きく関係している。衛生上の問題だけでなく、すべての活動の非効率を招いている。物事の管理が乱雑なため、無駄が多くなる。経済や産業発展が遅れる理由も、そこにあるのではないかと思った。また、マラスの存在は、個人の力では容易に断ちきれない貧困の負の連鎖を示していた。加えて、教育の貧困や異常気象による作物への被害も聞かれた。これらはすべてエルサルバドル一国で起きている問題ではない。大小関わらず、必ず他国が関わっている。環境や治安問題、これらは、過去日本も経験してきた、あるいは、国を介して現在も続いている問題でもある。自ずと日本の歴史に意識が向いた。日本もかつては世界から支援を受けた事実を忘れてはならない。他国を知ることは、自国を知ること。まずは、私たち教師がそれを学ばねばならないと強く思った。

### ● 野村佳世

エルサルバドルでは、ギャング団による殺人被害が1ヶ月に約650人である。今年に入り、過去最悪の殺人率であり、世界的に見ても殺人率の高い国である。一方日本は、殺人よりも、自殺の多さで言えば、世界的に見ても多い。このように考えると、両国において、「命の大切さ」を共に考える必要がある。自分の命や相手の命の尊さ、生きることや生きがいの意味を共に考え、共に生きる喜びを味わうべきである。命に対する教育が必要である。そうすることで、自分の進路に対する考え方、将来の夢の実現が叶うものである。また、環境においては、ポイ捨てをしない、エコバックを使用する、リサイクルするなど、自分ができるところを見つめ直し、環境破壊をこれ以上行わないように共に考え、実行すること、これは共に乗り越えるべき課題である。

### ● 樋口耕平

エルサルバドルの学校訪問では、子どもたちの無邪気な姿にとにかく心を動かされた。学年が上がるにつれ、多様な事情で学校をドロップアウトする生徒が増えるという課題はあっても、何でも一生懸命やって、腹の底から大笑いしている姿をいつも見られることは、教員として本当に幸せだと思う。恐らく、子どもは世界中どこでも一緒なんだろう。生まれてからどんな環境で育つか、どんな大人（教師）に出会うかで人生は大きく変わる。国としての課題は、国によってさまざまだ。しかし、教育に関する課題を考えれば、どの国においても最終的には「目の前にいる生徒がいかに前向きなインスピレーションを与えるか」という課題に概ね辿り着くのではないか。今回の学校訪問を通じて、教員としての姿勢を再考するきっかけを得られた。国を作るにはまず人を作ることから。その責任の重さを痛感するとともに、醍醐味も実感できた次第である。